

認知症者の在宅生活を維持する非訪問型の生活評価・介入システムの標準化に関する研究

研究分担者：鐘本 英輝 （国立大学法人大阪大学・キャンパスライフ健康支援・相談センター・准教授）

研究協力者：石丸大貴 （国立大学法人大阪大学・医学部附属病院・作業療法士）
埤本大喜 （国立大学法人大阪大学・大学院医学系研究科情報統合医学精神医学教室・特任助教）

研究要旨：

非訪問型の生活評価・介入システムの標準化に向けた研究において、研究参加者のリクルートおよび評価・介入における助言を行った。その過程で、非訪問型の支援として、自宅の環境調整が幻視の改善に有用であった症例に関してまとめ、論文発表を行った。本研究において、日常生活動作（ADL）の維持・改善が介入の主要なアウトカムであったが、認知症者において ADL に影響を与えることが知られているアパシーに関して、既存データを用いた検討を行い、介入法の検討の一助となる知見について検討した。

A. 研究目的

本研究課題は認知症者の在宅生活を維持する非訪問型の生活評価・介入システムを構築することを目的としているが、認知症者では行動心理症状（Behavioral and psychological symptoms of dementia: BPSD）が日常生活動作（ADL）に影響を及ぼすことも知られている。そこで、研究分担者は老年精神科医として、本研究課題で実施している非訪問型の評価・介入が BPSD の改善に有効であった症例についての知見をまとめること、ADL への影響が強いことが知られているアパシーについて、アルツハイマー病（AD）、レビー小体型認知症（DLB）、前頭側頭型認知症（FTD）の 3 大認知症での特徴の違いについて、既存データを用いて検討した。

B. 研究方法

本研究課題で実施している非訪問型の生活評価法である Photo Assessment (PA) を

用いて幻視に対する介入を行った DLB の 2 症例について、評価と介入について検討し、症例報告論文を発表した。

大阪大学医学部附属病院神経科精神科（以下当施設）に受診し、AD、DLB、FTD と診断された症例の臨床データを抽出し、アパシーの自覚の有無、アパシーの内容に関する因子分析を実施し、その特徴の違いを検討した。

（倫理面への配慮）

本研究は、大阪大学医学部附属病院の倫理委員会より承認を得て実施した。

C. 研究結果

70 歳代後半女性、80 歳代後半女性で、著しい幻視を経験している DLB 患者に対し、PA を用いて自宅環境を評価したところ、幻視を誘発している環境刺激（ソファ上のクッション、カーペットの模様、ハンガーにかけられた衣服、人形）が同定され、これらを見えないように収納するなど環境調整した

ことで、自宅で幻視を訴える頻度や介護負担の減少を確認することができた (Ishimaru et al. Front Psychiatry 2024)。

2009 年から 2024 年に当施設を受診した 778 例の AD、240 例の DLB、103 例の FTD の患者データを抽出し、アパシーの有無およびアパシーの自覚の有無を比較検討したところ、アパシーは AD の 64.4%、DLB の 72.9%、FTD の 72.8%に見られ、うち自覚を伴わないアパシーは AD で 24.9%、DLB で 15.4%、FTD で 26.2%と、DLB には少ないことが確認された。AD と FTD ではアパシーの自覚の欠如は記憶障害の自覚の欠如とも関係しており、DLB ではアパシーの自覚の欠如は抑うつと関係していた (Kanemoto et al. 18th International Congress of the Asian Society Against Dementia 2024)。

さらに、Neuropsychiatric Inventory のアパシーの下位項目で聴取されるアパシーの内容に関して、この 3 疾患で因子分析を行ったところ、感情や社会的交流と関連する因子 1 と、行動および認知と関連する因子 2 が抽出され、FTD において因子 1 が他 2 疾患より高く、因子 1 の得点は右島回の血流低下と関係していた (鐘本ら. 第 29 回日本神経精神医学会学術集会 2024)。

D. 考察

日常生活に影響を及ぼす BPSD のうち、DLB で頻繁にみられる幻視は環境中の視覚刺激によって誘発されることが考えられ、このような刺激を除去することが幻視の改善につながる可能性が示唆された。このような介入を計画するにあたり、非訪問型評価である PA が有用である可能性が示唆された。

日常生活に影響を及ぼす BPSD のうち、あらゆる認知症で初期から見られやすいアパシーは、疾患によってその特徴や神経基盤が異なる可能性が示唆された。アパシーに対してはさまざまな薬物・非薬物療法が検討されているが、有効性のエビデンスに乏しい。この背景には、アパシーを呈する背景にある神経基盤や特徴の違いが多様であり、より個別化された介入が必要であることが関係している可能性がある。

E. 結論

本研究課題で検討していた非訪問型の生活評価・介入システムに関して、BPSD の評価介入への転用について検討した。居宅環境における視覚刺激によって誘発されている幻視に対しては、PA による評価・介入が有効である可能性が示唆された。また、同じカテゴリに分類される BPSD でもその背景は多様である可能性があり、より個別化された介入が求められる可能性が示唆された。本研究で主に扱った評価・介入法は居宅環境への個別性の高い評価・介入であり、BPSD への効果も今後期待できる可能性がある。現在、令和 6 年度に行った学会発表内容について、論文投稿準備中である。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Ishimaru D, Kanemoto H, Hotta M, Nagata Y, Koizumi F, Satake Y, Taomoto D, Ikeda M. Case report: Environmental adjustment for visual hallucinations in dementia with Lewy bodies based on photo assessment of the living environment. Front Psychiatry. 2024 Mar 15;15:1283156.

doi: 10.3389/fpsy.2024.1283156.

2. 学会発表

1. Hideki Kanemoto, Takashi Suehiro,
Daiki Taomoto, Yuto Satake, Kenji
Yoshiyama, Manabu Ikeda.
Anosognosia of apathy in three major
neurodegenerative dementia: a cross-
sectional study. 18th International
Congress of the Asian Society Against
Dementia, poster, Penang, 2024.8.15-
17
2. 鐘本英輝, 埤本大喜, 池田学. 前頭側
頭型認知症のアパシーの症候と神経基
盤. 第29回日本神経精神医学会学術集
会 シンポジウム 1, 大阪, 2024.12.6

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし